

学術研究所主催講演会記録

第27回 講演会

日 時：平成27年 1 月21日（水）13時00分～14時30分

場 所：3－E 教室

講 演 者：鍛治 哲郎 教授（教育学科）

演 題：心のはたらきと生命の連鎖（本誌に掲載）

心のはたらきと生命の連鎖

鍛治 哲郎（教育学科・教授）

皆さんこんにちは。教育学部の鍛治でございます。今日は、学期末・学年末のお忙しい中をお集まりくださって有難うございます。学術研究所の廣田先生には、このような機会を設けてくださったことに、心より感謝申し上げます。先生から最初に講演会の依頼を受けましたのは、昨年夏前の5月か6月だったと思いますが、何についてお話をしたものか全く頭に浮かびませんでした。新任の身には、新しい授業と環境への対応と適応で、そこまで気が回らなかったのですが、それ以上に、学生の皆さんに分かりやすい内容を、というご依頼でしたので、これは難題だと感じました。テーマについて落ち着いて考えてみる必要があると思い、時期を先に延ばしてくださるようお願いしました。その時だったか、よく覚えていませんが、もう一つ廣田先生にお願いしたことがあります。それは、同僚の先生方への自己紹介を兼ねて話したい、という希望でした。20歳前後の人に話すにしても、多少なりとも自分の専門に絡めないと力がこもらないものです。折角の機会ですから、先生方への新任としての挨拶にもなる内容を、と考えたのです。

ようやく10月になってからおおよそのテーマが決まりました。このようなお誘いがなければ、私にとっては、この1年は未知の環境に慣れることにひたすら費やされ、新しい仕事に踏み出すことなく過ぎ去っていただろうと思います。まだ開拓途中の対象を取扱いますから、今日のお話には、未消化な部分があります。その点はどうぞご容赦ください。そういう訳で、かつて少し齧りはしたものの、大変そうなので避けていた思想家を、本棚の奥から引っ張り出して、その考え方を理解できる範囲で取り入れながら話を組み立ててみることにしました。この思想家を中心に置けば、学生の皆さんにも分かり易い事例を交えてお話できると考えたのです。それに加えて、本学にはさまざまな専門の先生方がいらっしゃいます、できればどこかで何らかの接点が生まれるようなテーマの設定ができれば、と欲張ってみたという事情もあります。学術研究所という名称は、そのような横のつながりを考えての命名かと思っています。私の思惑が的外れにならないことを祈っています。前置きが長くなりましたが本題に入ります。

1. 生き物と事物の心

宮崎駿監督のアニメは、子供が小さいころ一緒に見ていました。あのトトロというのは樹木の精のようなものなのではないでしょうか。形態からすると森の生き物か何かに見えますが、やはり西洋風に言えば精霊なのでしょう。こうした存在は、子供向きの創作として、物語として楽しんでいる限りでは、自然に納得して受け入れることができますが、小さな子供ならばともかく、大の大人が日々の現実なかで、例えばその山の中で先ほどまでトトロに会っていました、などと言ったら、怪訝な顔をされます。繰り返してそのようなことを口にしたら、この人大丈夫かなと疑われてしまいます。それが現代という時代であり、大人へと成長していく道筋で今日誰もが身につける常識的な判断です。

ところが、時代を何百年か溯ってみると、事情は異なります。動物界だけでなく植物界、そして事物の世界にも、至る所に霊が住み着いていたと言われます。言葉というものは難しいもので、「霊」というと精妙な感じがしたり、また幽霊を連想したりします。靈魂という言葉を用いると硬い感じがします。魂と言い換えると少しまたニュアンスが違ってきます。これを心と言ってみると随分人間的になります。これから話では適宜選択して使いますが、魂や心の意味にしても柔軟に考えていただければと思います。話は飛びますが、ヨーロッパの哲学的伝統を溯って、アリストテレスの『魂について』という著書を覗いてみると、植物にも動物にも靈魂、魂があるとされています。靈魂、魂が生命の根源のようなものであるとすれば、植物に魂があっても不思議ではない。ところがこのアリストテレスもさすがに事物には魂を想定していません。それに対して日本では、今でも、という言い過ぎかもしれませんが、事物にも靈魂が宿る、あるいは宿るかのように振る舞っている。若い人はご存じないかもしれませんが、針供養という行事があります。裁縫で折れてしまった針を神社に納めて供養する。供養するからには、針を死者のように扱う、ということは針が生きもののように感じられていたからでしょう。針に限らず、長い間身近において使っていたもの、大切にしていたものには、人は離れがたい思いを懐くようになる、そういう経験は誰にでもあると思われます。愛着を覚えて手放し難い、というあの心のあり方です。

この愛着という感情は人間からの一方的な思い入れにすぎない、とふつう私たちは考えます。が、本当にそうなのでしょうか。針でも器でも道具でも、こうしたものは長年使ってくれた人と、密かに心を通わせようとしているのだ、などと私が言ったら、これはやはり変な奴を同僚として迎えたものだ、と皆さん思われるでしょう。しかしながら、そのような感じが何となく分かるという方も、皆さんの中には何人かいらっしゃるのではないかと期待します。今日のお話はそうした迷信じみた感じ方と多分に重なり合う領域を縫って進みます。

昔の素朴な人々の身になって考えてみると、ものを大切にするという精神も、ものに魂を認めることと無縁ではなかろうと思えます。なぜものを大切にするのか、それを合理的に説明することは可能でしょうが、それは理屈になりますから納得できてもどこか味気なく、なかなか心には届きません。そこで、ものにも魂があるからなのだ、と答えてみるのです。たしかに成年に達した者には、このような考え方は奇妙に響きます、即座には何を言っているのか理解できません。ところが今日、後程ご紹介する20世紀前半のドイツの思想家ルートヴィヒ・クラークスを私なりに敷衍すれば、そういう風に答えることができるのです。

2. 人の成長と人類の進歩

今、子供たちの間では妖怪が流行っています。時にはその中に大人も混じっていますが、たいていは子供たちの間での現象です。先ほどからの靈魂の話も、この妖怪と無関係ではありません。どちらも、子供たちには受け入れやすい、あるいは信じ込むことのできる話題です。それに対して大人にとっては、こうした魑魅魍魎は時には馬鹿げた、時には可愛らしくも他愛ない戯言にすぎません。無知迷妄は、成長とともに、つまり教育を受けることによって消えていくものです。さて、一人の人間の成長と同じように、人類の歴史にも

発達と成長がある、という見方は今日ではあまり流行らないでしょうが、歴史の発展を前提にして自分が生きている時代が最高の段階であると考えられていた時代があります。このような楽観的な歴史観に対して、人間の成長の比喩を使えば、歴史にも老いと死があるだろうと半畳を入れることができるでしょうが、今は昔、19世紀には老後を考えることのない発展史観が盛んでした。

ヘーゲルというドイツの哲学者がいます。18世紀末から19世紀前半に活躍した人です。このヘーゲルがベルリン大学で行った講義が、死後弟子の手によって『歴史哲学講義』として公刊されます。これは当時、つまり19世紀の20年代30年代、日の出の勢いにあったプロイセンを頂点として、過去の歴史のなかで人間の自由がどのように実現されていくかを描いた、壮大な物語です。

この講義の本論は、中国、インドから始まり、ペルシャ、ギリシア、ローマ、ヨーロッパ中世そして近代へと至ります。中国、インド、それとエジプトを含むペルシャは付け足しのような観があります。ギリシア以降がいわば歴史の本番です。世界史を構成しようとしていますから、文明が発達した地域ごとの区分けが必要になります。ヘーゲルは各文明地域の具体的な叙述を始める前に、新大陸とアフリカを除外しています。アメリカとオセアニアの新大陸はまだ歴史が新しいからです。そう説明されています。ヘーゲルの時代には、まだ中南米の古代文明について満足な知識がなかったからです。アフリカについては地中海沿岸部とエジプトを除いて、ばっさりと切り捨てられます。

アフリカ切り捨ての理由ですが、ここで先ほどの妖怪の話が関わってきます。ヘーゲルによれば、アフリカは「自らを意識する歴史が明け染める前の、まだ夜の闇に包まれた子供の国」です。「子供の国」というと明るいイメージかもしれませんが。表紙に笑顔の子供の絵を載せた「子供の国」というタイトルの子供向けの本があったように記憶していますが、ここでは暗い闇の世界です。子供の比喩はこの箇所以外では用いられていませんから、それほど気に留める必要はないのかもしれません。が少し後に、アフリカの原住民の宗教を語る部分では、彼らの恣意的考え方、つまり自分勝手について言及しています。恣意的とか自分勝手という特性は、一般に子供っぽいとされますから、ここにも子供との類似でアフリカが眺められていると、踏み込んで解釈してみます。このアフリカ原住民の自分勝手を表すものとして取り上げられているのが、物神Fetischです。この物神という言葉ですが、日本語で物神と訳しますように、いわば神のように崇められた事物を意味します。ヘーゲルは以下のように解説しています。「動物、樹木、石、あるいは木像であれ、彼らが手当たり次第に選んで守護神へと高めた対象」、「それが物神であり、これはポルトガル人が最初に広めた言葉で、ポルトガル語の *feitico*、魔術に由来している。」¹⁾

19世紀も後半になると、いわゆる未開民族についての民族学上の研究が活況を呈します。アニミズムという概念がありますが、霊魂が事物にも宿っているという一種の信仰です。この概念はイギリスの民族学者エドワード・タイラーが用い始めたということですが、ヘーゲルの言う物神もアニミズムへとつなげてとらえることが可能でしょう。ここで先ほどの子供という比喩に戻ってみますと、20世紀の心理学や精神分析学では、単なる喩としてではなく子供の段階の人の心がアニミズムと結びつけられます。ジャン・ピアジェがそうですが、フロイトの場合にはそこに人類の歴史的な過程も重ねあわされています。ヘーゲルに戻りますと、アフリカではまだ歴史が始まっていない。そこは「歴史のない世界、開か

れていない世界」です。まだ「自然のままの精神に囚われた」状態で、世界史の舞台に登場することはありません。ヘーゲルにとって、歴史とは、精神が活動し展開し自己を実現する舞台です。アフリカでは精神がまどろんだまま本来の活動を開始していない。自然のままの状態とは野蛮と未開です。世界史は精神の発展過程なのですから、発展のないアフリカは歴史の外に排除されることになります。

精神とは強さと厳しさがある言葉です。ですから精神主義と言います。精神論という表現もあります。ヘーゲルの「精神」はドイツ語の **Geist** です。人類の文化と社会を形作り動いていく精神とは何なのでしょう。少し寄り道をしますと、昔学生の頃、和辻哲郎の『日本精神史研究』という表題の本を手にとったことがあります。中身をばらばら捲ってみますと、仏像や万葉集、古今集、源氏物語、竹取物語などが扱われていて、肩透かしを食らわされた気がしました。もっと硬い内容と思っていたからです。ではなぜ精神史という硬い言葉を用いたのか、なぜ「心の歴史」というようなタイトルにしなかったのか、中身をまともに読まなかったものですから、当時は不思議な気がしました。和辻の背後にはヘーゲルがいたわけです。ヘーゲルにとっては芸術も精神の展開の中で生まれて来るものからです。

心あるいは魂を表すために、ドイツ語では **Seele** という単語を用います。ヘーゲルにもこの言葉は用いられています。和辻は『風土』という作品の最後の方でヘーゲルに触れて、自らの風土の思想との接点を探っています²⁾。そこで引用されているのが、ヘーゲルが『エンツィクロペディー』のなかで **Seele** 「心」について論じている箇所です。「心」「魂」はヘーゲルにとっては身体性と深く結びついています。ですから風土、土地と気候へとつながることができます。ヘーゲル哲学は精神の哲学ですから、『エンツィクロペディー』のなかでも魂が扱われるのは、精神との関係においてです。精神の始まりは「主観的精神」と呼ばれ、この始まりの第一段階が「魂」です。魂のなかで意識が目覚めます。「魂」は意識が目覚める前に存在している。「精神は最初、自然の中に直接埋め込まれてしまっていて、自然によって規定されている魂である³⁾」と書かれています。魂は精神の発展の基盤にあるものです。そうであれば、『歴史哲学講義』のアフリカは、精神がまだ魂の段階にとどまっているといえます。ヘーゲル自身はアフリカの特徴を描く際に、魂という言葉を用いていませんが、「自然のままの精神」のなかに囚われているのがアフリカですから、アフリカは魂の国にほかなりません。

精神とか魂とか抽象的な言葉を脇に置いて、人類の歴史を顧みると、人類はアフリカで生まれたことは今のところ確かです、そしてその文明・文化はエジプトを除外すると、アフリカ以外の地で発達したということも今のところ疑いありません。が、アフリカという精神の在り方は、今日の知識をもとにすれば、地域的にアフリカに限った現象ではない。それだけでなく、時代的にも精神が自然にとらわれた状態を、特定の時代に固定することはできないでしょう。

ヘーゲルがこのように世界史から切り捨てたアフリカという精神の段階を、見直そうとした思想家が日本にいます。吉本隆明です。私の世代にとっては『共同幻想論』や『言語にとって美とは何か』という著作とともに懐かしい名前ですが、平成9年、1998年に『アフリカの段階について』というタイトルの著書を著します。丁度そこ鎌倉の海で、吉本が海水浴中に溺れて、九死に一生を得た翌年の仕事です。もちろんこの事故を本の内容に関

連づけたいのではありませんが、この著作はアフリカのものを野蛮、未開として退ける、ヘーゲル、マルクス、エンゲルスおよびモルガンの歴史観に対する批判です。最後に名前を挙げたモルガン、ルイス・ヘンリー・モルガンあるいはモーガンは、アメリカの民族学者・人類学者です。1877年に公刊された主著『古代社会』には、「野蛮から未開を経て文明へと至る人類の進化過程に関する研究」という副題が添えられています。このような野蛮、未開、文明へと順次歴史を構成していく歴史観に吉本の矛先が向けられています。

表題の「アフリカの段階」という概念ですが、吉本は、まだ文明の灯がともっていないどのような社会にも、世界的な「共通性」があるという認識をもとにして、この共通性を「アフリカの段階」と名付けています。近代主義的な歴史観は、「世界史を人類の文明の発展と進化の過程と見な」して、このアフリカの段階を歴史の圏外に追いやってしまう。「ヘーゲルやマルクスのいう歴史や、モルガン、エンゲルスの発展史観では、歴史という概念は、外在（文明）史という概念と同義になっている。あるいは歴史という概念は限りなく外在史にだけ収斂してゆくと見なされている。⁴⁾」

吉本は、この文明史（外在史）に精神の歴史（内在史）を対置します。吉本のいう精神はヘーゲルの精神とはやや違います。人間の内面、魂や心を含んだまま動いている概念です。近代・現代においては芸術や文学という形を取ってかろうじて生き延びているものです。再び引用ですが、「ヘーゲルが旧世界として文明史的に無視した世界は、内在の精神史からは人類の原型に行き着く特性を象徴していると、考えることができる。そこでは天然は自生物の音響によって語り、植物や動物も言葉を持っていて、人語に響いてくる。そういう認知は迷信や錯覚ではない仕方で、人間が天然や自然の本性のところまで下りてゆくことができる深層を示している。⁵⁾」こうした考え方は、精霊や妖怪の世界に通じていると言っているでしょう。

3. クラーゲスの「心」「心情」の思想

精神や心はどちらも説明が難しい言葉です。特に日本語の心は意味がとても広いようです。下手をするとなんでも心になってしまいます。この精神と心の二つを対置させて、独自の思想を形作ったのが、先ほども名前を挙げたルートヴィヒ・クラーゲスです。吉本と同じようにアカデミズムの外で活動した思想家です。1872年に生まれ1956年に亡くなっています。主著は先年翻訳が出ました。そのタイトルは『心情の敵対者としての精神』、原題は **Der Geist als Widersacher der Seele** です。原文では「心情」は「心」とも「魂」とも訳すことができる **Seele** です。日本語の心は先ほども言いましたようにいろいろな意味を含みますので、「心情」と訳したのは、なかなか巧みです。「精神」はもちろん **Geist** です。この翻訳は大変な仕事です。クラーゲスのドイツ語は込み入っていますし、1500頁にも及ぶ大著です。千谷七郎とそのお弟子さんたちが訳しています。千谷は東京女子医科大学の精神科の教授を務めた医者です。クラーゲスの理論を治療に応用していたと聞きます。どのように治療の現場に活かされたのか分かればいいのですが、専門の仕事については調べがついていません。クラーゲスの思想に非常に造詣が深いだけでなく、翻訳はほとんどがこの人の手になるものです。もっとも今では古本でしか手に入らない本が多いのですが。

さて、クラーゲスはドイツでも忘れられた思想家です。向こうの知的な友人にこの名前を出すと一寸嫌な顔をされます。それは反ユダヤ主義と絡んでいるからです。クラーゲス

に烙印を押すとすれば、ユダヤ・キリスト教の伝統とギリシア哲学の伝統をひっくり返そうとした、つまりヨーロッパの思想と宗教、文化の根幹に無謀にも戦いを挑んだ反近代、反合理主義、反理性のトンデモナイ思想家となります。が、反ユダヤ主義の問題や、ヨーロッパ近代思想史の中でこの思想家をどのように位置付けるかは今日の関心事ではありません。

『心情の敵対者としての精神』というタイトルから想像できるように、心情、心あるいは魂がクラークスの思想の中心に置かれています。ではその心、心情とはどういうものなのか。たとえば身近な例を挙げれば、山の木々が風に大きく揺れざわめいている。そのことに気づき心を留め木々の様子に見入ったとしましょう。子供の頃に、いや大人になってからも、何か一つのものや情景が特別な輝きを持っていた、それに没頭していたという思い出があるのでしょうか。そのような体験があった場合、クラークスによれば、そこには心が働いているのです。それだけのことか、何も特別な出来事ではない、と感じるかもしれません。でも、その時、心、心情が働いているとはどういうことなのでしょう。

少し回り道をしますが、クラークスによれば、生命とは留まることなく進行し流れていく過程です。生きているということは体験の連続過程です。したがって生命とは絶え間なく続く体験の能力です。体験と訳したドイツ語は *erleben* です。動詞 *leben* 「生きている」を他動詞化したものです。ですから体験とは「何かを生きている」という意味になります。生命が体験の能力であるというのは、ドイツ語では言葉の成り立ち上、自然なわけです。この体験は無意識的に行われています。生きることは意識に先立っているからです。クラークスにとって生命は無意識と同じです。生きることは思いの外です。クラークスはこう言っています。「成人に比べて子供は間違いなくより素朴であるお蔭で、体験に没入するが、成人は体験が生じたと思う間もなく、それを意識するために、たちまち体験から引き離されてしまう。⁶⁾」

では生命は何を体験しているのでしょうか。クラークスはごくありふれた現象を例にとって説明しています。たとえば、ふと目にした「黄色く色づいた木葉」や、ある日の「黄昏」の体験は記述可能だろうか、と問います。ちょっと考えてみただけで、そこには微妙な色彩や日差し、天候や湿度気温などさまざまな要因が重なり合っているため、決して感覚的要素や数値に還元することはできない。何よりもそれを体験した人のその時の人生がそこには関わっている。だが、記述不可能であるにしても、体験された「色づいた木葉」も「黄昏」も明確な何かであることに疑いはない。ではそれは何なのか。それをクラークスはドイツ語で *Bild*、千谷の訳では「形象」であると言います。「形象」は日本語ではそれほど用いられないので先入見による誤解はまだ少ないのですが、ドイツ語の *Bild* はごく普通の単語です。写真も絵もイメージも *Bild* です。しかしクラークスの言う「形象」は模写像でも視覚像でもありません。生命の過程の中で体験されるのですから、固定されることなく移りゆくものです。

この形象と心、心情とは不可分の関係にあると考えられています。形象を見ているのは心です。見るという言葉が用いられていますが、五感のなかの視覚が意味されているわけではありません。この「見ること」*Schauung* は、感覚を通すのですが、個々の感覚に縛られてはいません。意識的に行われる諸感覚への仕分けは、体験そのものから切り離されてしまった後に行われます。生命の体験過程とともに現れてくるのが形象です。したがっ

てクラークスの言う「見る」ということは能動的な行為ではありません。形象が形象として現れてくるのは、もちろん心にとってです。文学作品からごく短い例を一つ取って心と形象のつながりを説明してみましょう。

大正期に生きた日本の詩人八木重吉の作品です。「或る日の　　ころ」というタイトルです。

或る日の　　ころ
山となり

或る日の　　ころ
空となり

或る日の　　ころ
わたしと　なりて　さぶし⁷⁾

この詩の「山」と「空」は形象です。山や空を見ている心は、山や空と同化しています。心が「山」になったのですから、「山」の形象には心が宿っています。あるいは心そのものです。ところがその体験を得られずに、心が「わたし」になってしまうと、つまり「わたし」を意識すると、心は冷たく凍えます。

クラークスによれば意識は生命過程と真っ向から対立するものです。生命は流れ過ぎ去り消えていきます。意識とはその流れに打ち込まれた断点です。また自我、「わたし」も、時間の流れの外に、措定されたものです。意識にしても自我にしても、あるいは理性、認知、判断、意志、意欲といったものは、クラークスにとってはすべて精神の作用です。心の敵対者である精神の働きにほかなりません。ですから、詩にありますように、私に戻ってしまうと心は萎え衰えます。敵対者という強い言葉を使うかどうかはともかくとして、私たちがふつう「豊かな心」という場合、その心は意識の働きとはどこか異なるものでしょう。また認知とか意志、意欲などとも違ってきます。クラークスが批判する精神の働きは、確かに人間の営為にとっては重要です。が、心とは別の能力であって、「豊かな心」と同時に働くことはなかなか難しいように思われます。

ここでクラークスの言う精神について説明しておきます。精神とは、人間の段階で初めて生命体のなかに入り込んできたものです。クラークスの場合、すべてに、地上と宇宙のすべてに生命が認められていますが、その中で、いわゆる生き物である植物、動物、人間は、個別的生命体と呼ばれます。植物では心と肉体（身体）**Leib**はまだ目覚めていない。二つともまだまどろんだ状態にあるとされます。動物になると肉体が目覚めます。そして人間において初めて、心が完全に覚醒します。この人間という生命体に、いずこからともなく精神の楔が撃ち込まれた、とクラークスは述べています。私などは、心の覚醒と同時に精神も覚醒した、と考えたくなりますが、そうではない。そしてこの精神は、時とともに心を侵食して行きます。大学の図書館でクラークスの名前を検索してみると、一つだけ引っかかります。『人間学道しるべ』という千谷七郎の編著です。そのなかに1954年にクラークスが行った短いラジオ講演が収められています。「心の行方」という表題です。

そこでは時代の状況を回顧しながら非常に悲観的に、精神の横暴は行き着くところまできた、これを阻止できるのは生命体にとっては外部からやってくる力によるしかほかにはない、と語られています。

なにやらSFめいた話になりましたので、引き返します。地球のすべてに生命があるという見方は、生き物はすべて地球とつながっているという考え方と通じています。宇宙はどうでしょう。昨年ハヤブサ2号が打ち上げられました。その主要な目的は生命の源を探ることにあるとのことです。目指している彗星は太陽系のなかでしょうが、太陽系以外にも生命体の存在は想定されています。このような生き物、特に人間と地球あるいは宇宙とが繋がっているという思想は、芸術の領域に目を移してみると、クラークスと同時代に同じような見方に出会います。パウル・クレーという画家がいます。20世紀の前半に活躍したスイスの画家です。このクレーがバウハウスという芸術学校で教えていたときに「自然研究の道」というタイトルの論考を発表します。そこには、事物を「視覚的に見る技術」の発達に比べて、「非視覚的な印象と表象を見えるようにする技術がないがしろにされている」と述べられています。この「非視覚的な印象と表象」がどのようにして得られるのか、それは芸術家が「地上の生き物であって、全体のなかの生き物、つまり星々のなかの一つの星の上の生き物⁸⁾」だからだ、とクレーは書いています。芸術家と対象とは共に地球に根を持っていて、非視覚的な道が足下から目に通じている。それとともに宇宙的な共通性も持っていて、それが上から降りてくる非視覚的な道である。その様子をクレー自身は図によって示しています。その図を注の後に掲げておきます。丸い大きな円が世界、つまり宇宙です。その中の下の方に小さな円がありますが、これが地球です。この地球から左右に人魂のようなものが伸びています。左が芸術家、右が対象です。

芸術家、画家が描こうとする何かを見ている。その時には地球を通して、また宇宙を通して対象と結びついている。クラークスの言葉を借りれば、このような関連のなかに見えてくるものが形象です。ですから形象は大地と宇宙とつながっています。というよりも、形象を通して我々は初めて自分が大地と宇宙とつながっていることに気づくと言ったらいのでしょうか。クラークスによれば、動物は肉体と感覚に囚われているので近くのものしか見えない。すべてが欲動との関係でとらえられるからです。ところが人間においては、心が肉体と感覚に勝っているので、遠方を見ることができる。この人間の能力は直立二足歩行に由来しています。動物は前方しか見ない。人間はそれに加えて遥か彼方の宇宙を望むことができる。宗教史家のミルチア・エリアーデが確か宗教現象と二足歩行と結びつけていたと覚えています。クラークスは宗教を語ることはありません。宇宙との生命論的な繋がりです。形象に戻ります。どれほど距離的に近くても、形象には遠方が揺曳している。この遠方とはまず空間的な遠方ですが、クラークスにとっては時間的な遠方、過去をも意味しています。

したがって、この遠方との繋がりとは生命の連鎖と言い換える事ができます。それは宇宙的な規模の関連であるとともに、生命体を例にとれば生命体誕生以来脈々と続く命の継承です。60代半ばの私は、子供の時の私とは細胞レベルではすべて入れ替わっている。それでも私は私なのは、自我があるからではなく、形象が伝えられているからだ、とクラークスは言います。形象も子供の時から成人を経て老年へと変化していきます。「形象」を千谷は「面影」とも言い換えています。私は子供時代の面影を宿している。私の面影は娘

に伝えられる。その時にも形象は変化するのですが、面影として形象は伝わっていきます。クラゲスは、生き物、樹木でも魚でも猿でも、数千世代を経てもなおそれぞれの属の個体に維持されているのは何か、という問いに、それは形象なのだと答えます。それぞれの種・属の個体に原形象が受け継がれているのだと述べています。

4. 三木成夫と心

そろそろ日本に戻って話を終えましょう。クラゲスの影響を受けたのは千谷七郎だけではありません。千谷を介して自らの学問に独自の仕方クラゲスを取り入れたのが三木成夫です。三木については、保育学、幼児教育をなさっている方はどこかで名前をお聞きかもしれません。ずいぶん前になりますが築地書館から『みんなの保育大学シリーズ』が刊行され、そのなかの一巻として三木の『内臓のはたらきと子どものこころ』が収められています。また中央公論社から今でも『胎児の世界』が版を重ねているはずで、三木は解剖学者です。東京芸術大学の保健センターに勤めていました。

個体発生は系統発生を繰り返す、という学説があります。反復説と言われています。19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルが唱えた説です。ヘッケルの意味では今日通用しないとされていますが、個体発生と系統発生の中に一種の反復性があることは確かです。三木は解剖学者として、受精卵からの個体発生のなかに系統発生の名残を発見することに務めます。鶏の胎児の臓器や血管などの生成・成長過程を調べて、そこに動物が海から陸へと上がった過程の痕跡を突き止めます。同じようなことが人間の胎児についても確認されます。この胎児での繰り返しを三木は古代記憶あるいは古代形象と呼んでいます。「形象」、「記憶」は「すがたかたち」、「おもかげ」とも言い換えられます。「このからだには新旧入り雑じった祖先のおもかげが宿される。ときに露わに、ときに秘めやかに、あるものは器官の構造のなかに、あるものはその機能のうえに。⁹⁾」もちろん祖先とは両親からたどって動物の始まりに至るすべての系譜です。

三木は「形象」を単に生物学的、解剖学的に用いているわけではありません。もう一つ引用します。「われわれがなにごころなく自然に向かった時、そこでわれわれの五感に入ってくるものは諸形象すなわちもろもろの<すがたかたち>であろう。路傍の石ころを目にしても、小川のせせらぎを耳にしても、秋のけはいを肌で感じて、そこにあるものは例外なくこの<すがたかたち>であり、それらはことごとく生きた表情でわれわれに語りかけてくる。¹⁰⁾」そして、その少し後には、生命は「森羅万象の<すがたかたち>のなかに宿り」、人間の生命とは「人間の持つ<すがたかたち>そのものである」、と語られています。これはクラゲスです。もちろん<すがたかたち>という言葉から、視覚的なものだけを連想してはいけません。

しかし生命と形象はいいとして、心について三木はどのように語っているのか。そこには解剖学者としての本領が発揮されています。心は内臓の働きだと言います。人間の身体は外壁系と内臓系に分かれる。外壁系とは神経と筋肉です。感覚と運動に関わる部分です。神経は脳においてもっとも発達しています。内臓系は生命の担い手であって、食と性を営む。動物の食と性の周期は太陽と地球との関係、月と地球との関係によって決まっている。ということは動物の体内には宇宙のリズムが宿されている、と三木は考えます。内臓系を代表するのが心です。したがって心は自然のリズムに呼応し、感応します。

内臓についても一つ指摘されていることは、内臓と植物との関係です。アリストテレスの伝統に従って、人間の体を植物性器官と動物性器官に分ける分類法です。前者は「呼吸・循環・排出」に、後者は「感覚・伝達・運動」にそれぞれ三層系の分化を遂げ、両方の器官を支える役割を果たす「循環系」と「伝達系」の中心にそれぞれ心臓と脳が形成される。したがって心臓、心は植物的機能を象徴しています。心は自然の運行に即しています。植物は動物よりもはるかに密接に宇宙のリズムに組み込まれています。大地に根を張り、茎や幹は葉をつけて大空へと光を求めて伸びていきます。クラーゲスは人間が直立2足歩行を始めたとき植物と同じ姿勢を取ったのだと言います。植物の心はまどろみながら地球と宇宙の動きを、つまり彼方を感じ受している。人間において覚醒した心は形象を通して遠方を見ることができる、あるいは形象に心が動かされる時には、そこに遠方の輝きを感じられている、ということでしょう。

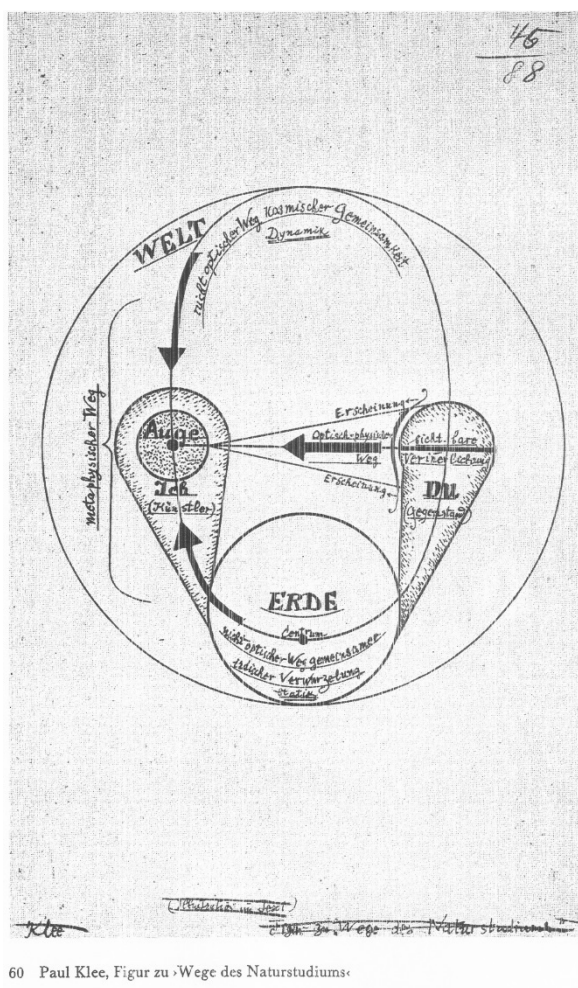
私たちは、心豊かに育つようにと子どもに願いを託します。私たち自身、心豊かでありたいと念じます。が、「豊かな心」とはどういうものか、なかなか説明が難しい。クラーゲスによれば、心とは感應するもの、受動的なものです。心に現れてくるものとは形象であって、宇宙と地球と生物と、もちろんほかの人間ともつながっている。それをどれほど感受することができるか、それによって豊かさは増してゆく、ということになるのでしょうか。「心を鬼にする」というような言い回しがあります。その場合には心は意志の力で操作されます。もちろん意志への従属は日々の営みにおいて不可欠でしょうが、この言い回しから逆に、心は緩やかに揺蕩うものだと推測することが可能でしょう。また、心を鬼にするのは自分のためではありません。他を思いやってのことです。意欲や、意志、意識、理性などの精神と対置させて心を論じるクラーゲスの思想は、心や人間という生き物について考える場合に、一つの手がかりになると思って、その一端を私なりに紹介した次第です。話が心に響く内容であったかどうか、心もとない限りですが、長い間ご清聴ありがとうございました。

* 本稿は、平成27（2015）年1月21日に鎌倉女子大学学術研究所主催の講演会で発表した原稿に、若干の修正と追加を施し、引用部分を中心に注を付したものである。

注

- 1) Hegel, G.W.F., *Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*. Werke 12, Frankfurt a. M. 2012 (10.Auflage), S.123.
- 2) 和辻哲郎『風土』(岩波文庫版)、2013年、339頁以下参照。
- 3) Hegel, G.W.F., *Gesammelte Werke*, hrsg.v.der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaft, Bd.13, Hamburg 2000, S.185.
- 4) 吉本隆明『アフリカの段階について』、春秋社、1998年、142－143頁。
- 5) 同上書、28－29頁。
- 6) ルートヴィヒ・クラーゲス『心情の敵対者としての精神』、うぶすな書院、2008年、第1巻344頁。Ludwig Klages, *Der Geist als Widersacher der Seele*, München/Bonn 1960, S.257.
- 7) 八木重吉『定本 八木重吉詩集』、彌生書房、昭和54年、47－48頁。

- 8) Klee, Paul, *Wege des Naturstudiums*, in: ders., *Schriften. Rezensionen und Aufsätze*, Köln 1976, S.124.
- 9) 三木成夫『胎児の世界』、中公新書、2002年、135頁。
- 10) 三木成夫『人間生命の誕生』、築地書館、2002年、16頁。



Paul Klee の上掲書所収の図版60より